
車椅子と魔法少女

グラムサイト 2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

車椅子と魔法少女

【NNコード】

N4253S

【作者名】

グラムサイト2

【あらすじ】

8年前の冬の事件でヒース・オブ・ヒースの高町なのはを底い下半身不随になつた少年はリンクディのお願いで機動六課に入ることになつた。

少年は何を思うのか。

リリカルなのは始まります。

プロローグ（前書き）

車椅子と魔法少女始まります。

プロローグ

？？？「うん？一体」んな時間に誰だよ？」

と、文句を言いながら出ると、

？？？「こんばんはカムイ君、今、良いかしら？」

カムイ「悪いが良くないから一度と通信しないでください。」

と、通信を切るのとしたら、

？？？「ちよ、ちよっと待つてカムイ君、少しで良いから

カムイ「ならとっとと用件を言つてください。」

？？？「カムイ君、古代遺物管理部 機動六課に力を貸してくれないかしら。」

カムイ「お断りします。」

？？？「そんな、どうしても駄目なの？」

カムイ「当たり前です。なんで人の忠告も聞かず、自ら死に行くような奴や、友達が落ちただけで執務間に試験に落ちる奴や、身内や親しい人だけで部隊を作る奴の所で働くなんてまっぴらですよ。」

？？？「許してくれないの？」

カムイ「許すもなにもそもそも見舞い所か謝りにも」ない。

？？？「そ、それは」

カムイ「しかもかばつた人が居た事を全然覚えていないみたいですよ。そん所をどう説明するんですかりンデイさん？」

リンディ「だつて、その情報は・・・」

カムイ「消されてるですか？」

リンディ「ええ」

カムイ「残念ながら高町一等空尉が検索すれば出てくる仕掛けがしてありますから、その言い訳は通じません」

リンディ「・・・・それならどうすれば入ってくれますか？」

カムイ「そうですねーとりあえず俺はリミッターなしで」

リンディ「わかったわ」

カムイ「そして、俺の騎士達と使い魔を連れて行く。反論は認めないよ」

リンディ「仕方無いですね」

カムイ「まあ、文句言つて来た奴は首にするけどな」

リンディ「冗談よねカムイ」

カムイ「冗談に聞こえるか?」

リン黛イ「やっぽり本気ね」

カムイ「当たり前」

リン黛イ「やう。じゃあこれだけ?」

カムイ「リン黛イ。貸し5ね」

リン黛イ「え、5はかかるわよ、せめて2500じゃない?」

カムイ「わが、なに」の話は無かつた事で

リン黛イ「わ、わかつたわよ」

カムイ「じゃあ一週間後の10時~だろ?だから一日前に行くから、情報を送つとけよ?」

リン黛イ「わかつてるわ。ちゃんと譲つとくから」

と云つて通信を切ると、

「...」「主、リン黛イ殿からみたいでしたが、要件はなんと?」

カムイ「うん?起動六課にいけって」

「?」「それにはもうひと連れて行ってくれるのですよな」

カムイ「ああ、もひるんだよシャイン。今度は騎士全員連れて行くよ」

シャイン「本当ですか主?」

カムイ「ああ、了解はとった」

シャイン「そうですか、この話を聞いたらみんな喜びますね」

カムイ「ああ、特にイリス辺りは尻尾を振りそうだな」

シャイン「そうですね」

と言つた。

プロローグ（後書き）

前の小説読んでおかしかったので、書き直しました。

第一話 聖空と夜天（前書き）

はい、思つたより早く書けたので第一話登校します。

第一話 聖空と夜天

カムイ「個々が機動六課か」

シャイン「そのようですね」

????「だけどなんでわざわざこんな部隊を立ち上げたんだ?」

????「さあ、知らないし、興味もない」

????「でも、ここ」の部隊つて魔導師ランク・Sが5人以上居る部隊つてどうなの?」

????「本当にわざわざ魔力リミッターまで付けて」

????「しかし、主、本当に良いですか?」

カムイ「何が言いたいんだ」

ヴォルフ「いえ、高町の事なのですが」

????「ヴォルフ、今高町つて言つたか!」

ヴォルフ「ああ、言つたが落ち着け」

イリス「落ち着けるか、カムイが車椅子生活になつたのは誰のせいか忘れたのか」

「!」

????「それはわかってるが、落ち着かないか

イリス「何でそんなに落ち着いていられるんだよ、アイシャ。おい...//リア、アルト。お前らもなんか言えよーー！」

ミコト「えーと、なんかって言われてもねえ？アルト

アルト「ああ、主であるカムイが気にしていないので、僕達が叫んだ所でどうなるんだ？」

イリス「だけどーーー」

カムイ「はい、そこまでそれより早くいくぞ」

アイシャ「わかりました

イリス「あ、待つてよ」

と言つて六課に入った。

同時刻起動六課内。

?/?/?「うーん、カムイ・クナギサカー」

と少女が書類と睨めっこをしてたら、

?/?/?「はやてちやんどうしたですか？」と一五センチぐらいの少女が聞くと、

はやて「ああ、リインか。ちょっとこのデータなんやけど」

リイン「そのデータがどうかしたですか？」

はやて「いやな、リンディさん推薦してくれた人なんやけど、ち
ょっと、これみてみい」

と、リイン見せると、

リイン「何かおかしな事が書いてあつたんですか？」

はやて「いや、階級が書いてなかつたから、一体どうこう事やる思
つて」

リイン「うーん、以外に外部協力者なんじゃないんですねか？」

はやて「そうなんかなー」

リイン「そつですよーあ、そう言えばその人はいつ頃来るんですか
？」

はやて「今日」ひちに挨拶に来るらしいで

と二人で話してたら、

????「失礼します。ハ神部隊長。明日から黙動していくつて言つ
てる人がハ神隊長に挨拶をしたいと言つてるんですけど」

はやて「ん? もう来たんか?」了解や。隊長室に通してあげて

????「はい、わかりました」

はやて「えーと、カムイ・クナギサ君やつたつけ？」

カムイ「はい、カムイ・クナギサです。八神はやて二等陸佐」

はやて「はやてでえよクサナギ君」

カムイ「じゃあ僕もカムイで良いですよ」

はやて「じゃあカムイ君後ろの人たちは？」

カムイ「ああ、彼らは僕の家族で聖空の守護者達と僕の使い魔」

はやて「聖空の守護者」

カムイ「そう、みんな自己紹介」

シャイン「私は聖空の書の管理人格のシャインです」

アイシャ「嵐雲の騎士アイシャ」

ヴォルフ「雷晴の守護獣ヴォルフ」

ミリア「雨の騎士ミリア」

アルト「霧の騎士アルト」

イリス「カムイを守る使い魔イリス」

カムイ「そして、聖空の主カムイ・クナギサ」

はやて「聖空の書？」

カムイ「夜天の書の元となつた本。つまり源書ですよ」

と、言った。

第一話 聖空と夜天（後書き）

はい、はやてと話ました。
せて、次回は守護騎士達と話します。たぶん。

第一話 聖空と聖空の騎士達（前書き）

はい、待つてた人も待つてなかつた人もお待たせしました、第一話、
聖空と聖空の騎士達始まります

第一話 聖空と聖空の騎士達

はやて「なあ、疑うわけや無いんやけど、その聖空の魔導書つて
書の本當に夜天の魔導書の原書なん?」

シャイン「やうですよ。何故なら「はい、ストップ」#」

カムイ「その話ははやての守護騎士込みでの話が良いでしょ? から。
それに僕はこの通り座つて居るから同じものシャイン達は立つ
ばなしですか?」

と車椅子を撫でながら言つて、

はやて「それもやつやな。よし、食堂で話そつと、そろそろ食事の
時間やし」

と言つてこちろい食堂を田指した。

カムイ「さて、食事も終わりましたし、守護騎士の皆やんも揃つた
みたいなので、早速お話しましょ?」

と言つて一冊の本を取り出し、

カムイ「これが、聖空の魔導書、夜天の魔導書、いや、全ての魔道
書の原書です。」

？？？「これが、夜天の魔導書の原画」

？？？「でもよーシグナム。あたしはそんな話聞いた事無いぞーシヤマルはどうだ？」

シヤマル「私も聞いたことがあります」

カムイ「まあ、聞いたこと無くて当然ですよ。この魔導書は絵本の中、つまりおとぎ話でしかシグナル達が活躍していたベルカの時代では語り継がれていませんから」

？？？「ふむ、もしかして『赤騎士と姫物語』か？」

カムイ「それです」

はやて「『赤騎士と姫物語』ってどんな話なんザフイーラ？」

ザフイーラ「『赤騎士と姫物語』は簡単に説明すると、何事にも無欲な少年が家族を助ける為に騎士に入るが周りについていけなく、騎士を辞め、今までの給金を家に入れ、一人旅に出かけ、行き倒れていた老婆を助けた。その老婆がお礼をしたいと言つたが、少年はそれを断ると老婆が少年の目の前で若い女性にかわると、「私はあなたのような人を待つていた。あなたなら私のマスターにふさわしい」と、言つて懐から一冊の本を渡し、一緒に旅に出である塔に封印されていた姫を助け出す物語です。」

はやて「へーそんな昔話があつたんや」

？？？「それより、カムイだつたけ、お前」

カムイ「やつですよ、ヴィータさん」

ヴィータ「なあ、お前前にじつかで会つたことないか？」

カムイ「会つたことがありますよヴィータさん、覚えていないんですねか？」

ヴィータ「覚えてない……つてまさか、お前はあの時なのはを底つた」

カムイ「ええ、あのとき高町を底つたのは自分です。そして「と、視線を自分の足に向け、

カムイ「動けなくなつた原因ですよ」

と、言つて、

はやて「それ、ほんまなんカムイ君」

カムイ「ええ、本当ですよ」

はやて「でも、被害者は……」

カムイ「ええ、コースで流れたのは高町だけですよ。上から情報規制がされたんですから。まあ、理由はそのうち教えますよ。まだ、これはあなた達が知るには早い事ですか？」

はやて「やうなんか」

と、少し落ち込みながら言つたら、

ヴィータ「なあ、カムイ、お前なのはの事怨んでるか？」

カムイ「なに当たり前の事をいつてるんですかヴィータさん。怨んでないわけないじゃないですか？」

ヴィータ「でもなのはは情報規制のせいで知らなかつた訳だし」

と、おずおず言つが、

カムイ「何言つてるんですかヴィータさん。高町だけ、情報規制から外されているんですよ？」

ヴィータ「それはどういつ意味だ、カムイ！？」

カムイ「簡単な事だ、ただハツキングしただけ」

シャマル「ハツキングってそんな簡単にはできないはずよ？」

カムイ「そんなことはない、けつこう簡単にできるだろ？それこそたつ一人だけに情報を提示させるのも」

と、言い切つたら、

ヴィータ「なあ、カムイ、お前なのはをどうしたいんだ？」

カムイ「そうですねー俺はとりあえず自分の意思で、誰にも言われるでなく、自分で調べた情報で、謝りに来るなら、許すが、それ以外なら絶対許さない」

イリス「甘いよカムイ！－私は絶対何があつても許さない！－絶対同じ目にあつてもらわなきや気がすまない！－アイシャ達も同じキモチでしょ－！」

アイシャ「そうだな、イリスほどではないが、私達も大体は同じキモチだ」

と、言った。

第一話 騎空と聖空の騎士達（後書き）

まあ力ムイより、騎士達の方が怒るのは、無理無いでしょう？

それは騎士として当然！！

次回はたぶん六課での立ち位置の確認かな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4253s/>

車椅子と魔法少女

2011年5月15日01時55分発行